様式２

５－１１	主題	排泄に対する職員意識改革
自立支援	副題	「普通の生活ってなに」排泄を主題に考える
研究期間　３ヶ月	事業所	特別養護老人ホーム・吉祥寺ナーシングホーム

発表者：平林　基（ひらばやしもとい）	アドバイザー：
共同研究者：小林千華　茂田順由	

電　話	０４２２－２０－０８６９	メール	kjjshigeta@kichijoji-homu.com
ＦＡＸ	０４２２－２０－０８０６	ＵＲＬ	http://www.kichijoji-home.com/

今回発表の事業所やサービスの紹介	社会福祉法人至誠学舎東京を母体とし平成 6 年 12 月より事業を開始しています。入所５０名、短期入所 3 名の施設です。デイサービス、在宅介護支援センター、居宅介護支援事業所が併設されています。

《研究前の状況と課題》

○ 大人になってオムツをすることが普通か
- 今までは当たり前のようにオムツ交換を行っていた。
- 他の職員にも問題を提起し、共感を得られた。他の職員からも新たな気づきが得られた。

○ 本当にオムツが必要で使用しているのか？
- トイレでの排泄が基本としたいが安全のためという大前提のもとで目の前で見守りをしている状況。利用者にとって排泄しにくい環境。

○ 排泄（主にオムツ）に関するアセスメントが出来ているか？と考えた時、不十分であった。

○ 現場段階でなにが出来るのか？
- まずはオムツカバーを紙パンツに！

《研究の目標と期待する成果》

○ 職員の意識改善

○適切なアセスメントの実地

○ 精神的、身体的な利用者の変化
- 羞恥心への配慮
- 自尊心と健康を保つ

東社協 東京都高齢者福祉施設協議会 高齢者福祉研究大会（アクティブ福祉 in 東京'11）※無断転載・複製を禁じます

《具体的な取り組みの内容》

○ 変更にあたり注意点

・必ずしもオムツを着用してはいけないという事ではなく、利用者の状態を考えオムツの方が合っていると思われる際はオムツを着用する。

・漏れ、衣類交換が合った際は記録に残す。

- 夜間漏れが気になり眠れていない様子ならすぐにオムツに戻す。
- 夜間のみオムツ着用者について、覚醒している際はトイレかパット交換かの希望を聞く。
- スキントラブルの要観察。

平成 23 年 6 月 2 日からスタート

12 名、終日オムツ着用、夜間のみオムツ着用者を紙パンツに変更。

平成 23 年 6 月 9 日　ミーティング

- スキントラブル者　変化なし。
- 夜間オムツ着用者の内 1 名、トイレ後覚醒してしまう日もあり、ベッド上でのパット交換での対応に変更。
- 他の方は問題見られず、紙パンツの継続。

平成 23 年 6 月 27 日　ミーティング

職員間でオムツとは？について意見交換。

- 「大人」なのだからオムツを着用するのはおかしい。等の意見が挙がる。

《取り組みの結果と評価》

○ 夜間のみオムツカバー着用者だった方から「やっぱトイレの方が気持ち良い」と笑顔がでる。

○ 紙パンツの方が通気性良く、スキントラブルが軽減された。

○ 排便時漏れはあるが、臭いも漏れるためすぐに交換が行え、不快感の軽減に繋がる。

○ 職員の意識にオムツが当然ではなくアセスメントの余地がある。という意識が高まる。

《まとめ》

施行段階でパンツ使用に変更した利用者にオムツへ戻した方はいない。しかし今後必要性を感じて、オムツ着用は戻すケースもあるかもしれない。一方で、さらに一般的な下着へ変更できるケースもあると考えている。

これまで漠然と排泄介助＝オムツカバー着用としてきたことについては、今回のことを機会に排泄介助について改めて考えたり気づいたりするきっかけとなった。

「普通」とは何かを考えることで、今回は排泄を取り上げて利用者の心情に少しでも寄り添うことが出来たと思う。

《今後の展開》

・ 排泄に対するアセスメントの指標をつくり、それに準じて利用者個々の排泄介助の見直しを行う。

《提案と発信》	利用者の生活を支える上で「普通の生活」について考える事はとても重要な事だと思います。しかし、高齢者の施設での生活は普通ではないことが当たり前になりがちです。少しの工夫でその違和感を少しでも取り除ければと思います。

【メモ欄】

※無断転載・複製を禁じます